



## 平成 21 年度 横浜国立大学 FD 活動報告書

### 新たなステップへ

FD 推進部門長 上野誠也

横浜国立大学の FD 推進活動が新しい方向へ動き出す 1 年であった。教員の教育方法の改善からスタートした本学の FD 推進活動は、組織的な教育方法の改善へと展開する時期に来ていた。教員が担当する授業から、学科や学部が担当するカリキュラムへと改善の対象範囲を拡張することが望まれた。その背景に加えて、今年度は大学の教育目標である‘YNU initiative’が公開され、大学が掲げる教育目標の実現に向けてと目標にも大きな変化が見られた。このような変革への要求に対して、自らの行動を問い質しながら FD 推進部は新たな方向転換を生み出す活動を行った。

FD 活動は誰が実施しているかを問い質した。教育は教員のみでの努力によって築き上げられるものではない。職員の協力や TA のサポートで成り立っている。FD 活動も教員個人の活動から職員や TA を含めた教育スタッフの活動へと幅を広げる必要があった。その一環として、今年度から TA 研修会を実施することになった。一方、学生教育には、縦の協力だけでなく、横のつながりである教員間の連携も必要である。学生にとって、受講している授業が前後の科目と連続的に繋がっていれば、より高い教育効果が期待できる。教

員間の情報共有による新たな FD 活動を今後実施する計画である。具体的には、各教員が担当している授業が、全学的な教育目標にどのように関わっているかを認識してもらい、その観点から行う授業改善である。

FD 活動は誰のために実施しているかを問い質した。明らかに学生のために実施していることは疑う余地がない。従来の授業方法の改善では、学生が受ける授業において、より効率的に知識を習得することに主眼が置かれていた。学生は受身の立場であった。それに対して、今後の FD 活動への要求は、学生が自主的に学習する環境を構築することに視点が転換している。学生の主体性が尊重されている。学生が自ら学びたい授業を提案し、学生が自発的に知識を獲得する方向を生み出す学生参加型の教育改善である。

今後の FD 推進部は、各教員との距離をより近づけることを心がけたい。全学的な共通事項を取り上げていた一括集中型から脱却し、部局の特色に合わせた個別対応型への方向転換である。他大学における実例を参考にしながら本学へ展開する予定であるので、教職員の皆様のご協力をお願いしたい。

## 平成 21 年度 FD 推進部の活動

### 研修会・シンポジウム担当活動報告

#### 1) 初任教員研修会

**開催目的：**平成 20 年 4 月 2 日から平成 21 年 4 月 1 日までに本学および附属学校に採用された教員を対象とした研修会である。横浜国立大学の教育理念・教育目標などを踏まえて、魅力ある授業を行うための教育改善に取り組むと共に、初任教員が部局を超えて本学への帰属意識を持つきっかけになる場を設けることを目的とした。

**開催日：**平成 21 年 4 月 1 日

**開催場所：**教育文化ホール中会議室他

**参加者数：**60 名

**プログラム：**

[第一部] (全体で実施)

大学の概況について・・・

溝口周二副学長・教育担当理事

本学の教育について・・・

高木まさき大学教育総合センター長

FD 推進部門の話・・・

上野誠也 FD 推進部門長

情報セキュリティについて・・・

額田順二情報基盤センター長

就業規則、セクハラ対策等について・・・

村田憲幸人事・労務課長

[第二部] (各部局に分かれて実施)



初任教員研修会の様子

部局の紹介と質疑応答・・・各部局 FD 委員会  
**成果と課題：**新任教員にとって本学の教育の現状や就業規則などの共通した情報を知るよい機会となった。他部局あるいは他附属学校の教員と接する場としても有効であった。

参加者が大学での教育に携わる教員と附属学校で教育に携わる教員が混在しており、FD 推進部の活動は前者のみを対象としている。また、第二部の実施は各部局等に任せられており、対象教員が少ないなど、有効に活用できない部局もあり、改善が必要である。

#### 2) FD 合宿研修会

**開催目的：**学内の人的資源を発掘し、ファカルティ・デベロッパー(FDer)の役割を担う FD 推進のリーダー組織の構築を目指すことを目的とした。「じっくり話し合しましょう！FD を」をテーマに掲げ、授業評価アンケート・自己点検や YNU initiative をテーマとした少人数で長時間の議論の機会を持った。

**開催日：**平成 21 年 8 月 24 日、25 日

**開催場所：**八王子セミナーハウス

**参加者数：**17 名

**プログラム：**(WS はワークショップ)

WS-1 授業評価・自己点検の現状は？(より効果的な実施方法を議論した。)

講演-1 統一テストによる成績標準化と FD 研修、学生の授業評価・・・

大学教育総合センター 渡辺雅仁教授

WS-2 YNU initiative (原案を対象に内容の過不足を議論した。)

講演-2 観点別評価基準「横浜スタンダード」について・・・

教育人間科学部 海老原修教授

講演-3 専門職のコンピテンシー研究の動向と運用上の課題・・・

信州大学教育学部 伏木久始准教授  
WS-3 FD活動の今後に向けて（本学のFD活動の義務と期待を議論した。）

**成果と課題：** 日常生活では教員同士がFDに関して議論する場はほとんどないが、本合宿研修では異なる観点からFDを議論する場を持つことができた。特にWS-1やWS-3で得られた結論はFD推進部で次年度以降に向けた大幅な改革に活かす予定である。本研修会で得た情報を、全学の教員へいかに広めるかが課題として挙げられる。



合宿研修会の様子

### 3) TA 研修会

**開催目的：** 担当教員の自主的な判断に任せられているTA（ティーチング・アシスタント）の導入教育を他大学の講師を招いて実施した。実験補助や演習補助などの受講学生と接する機会の多いTAを主たる対象とし、実験のトラブル対応などを習得することで、受講学生の履修を援助する技術を高めることを目的とした。

**開催日時：** 平成21年12月7日

**開催場所：** 環境情報1号棟5階セミナー室

**参加者数：** 56名

**プログラム：**

TAの役割と責任・・・上野誠也FD推進部門長

TA実践ワークショップ／

TA経験者インタビュー・・・

東京農工大学 加藤由香里准教授

**特記事項：** 8月に実施した事前アンケートの回

収数 TA学生114件、担当教員59件



TA研修会実施風景

**成果と課題：** 担当教員ならびにTA学生を対象に実施内容の事前アンケートを行った。その結果を受けて、実験補助TAを想定した研修内容を設定し、自由参加型の研修会を企画した。開催時期が12月であったことは改善の余地があったが、実習内容等については適切であった。一方、外部講師に他大学での研修内容をそのまま実施してもらうことを依頼したことで、今後はFD推進部単独でTA研修会を実施するノウハウを習得することができた。

### 4) FD シンポジウム

**開催目的：** YNU initiative が制定され、本学の教育の目指す方向が公開された。それを受けて、個々の教員が授業で取り組む姿勢をどのように向ければよいかを考える場を持つことを目的とした。「目標達成型教育改善プログラム」がGPに採択された山口大学から講師を招いて基調講演をいただき、その後に授業形式に分けた分科会で議論を進めるプログラムを設定した。

**開催日時：** 平成22年3月26日

**開催場所：** 教育人間科学部6号館102教室／7号館201、210、211教室

**参加者数：** 31人

**プログラム：** [全体会]

挨拶 YNU initiative について・・・

溝口周二副学長・教育担当理事

目標達成型大学教育改善の現状と課題・・・

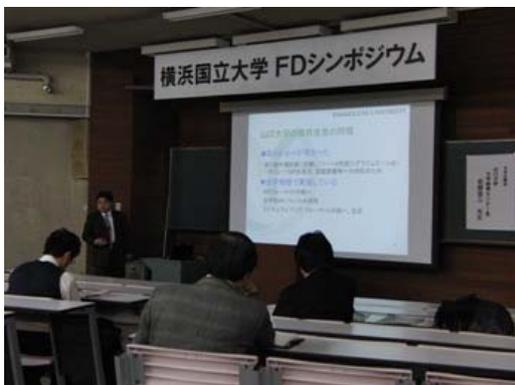
山口大学大学教育センター 岩部浩三教授  
[分科会]

- (1) 座学・一斉教授分科会：社会科学系における  
授業改善とカリキュラム改革、学生参画・基礎演習と専門科目
- (2) グループ学習分科会：講義の中でのグループ  
の授業案づくり、「グローバルスタディ・ツアー」に向けて
- (3) 実験・実習分科会：製図科目への模型製作の  
導入、コンピューティング演習における課題  
の選択

[ふりかえり] 分科会討論の報告と議論

**成果と課題：** 基調講演では山口大学で実施しているカリキュラムマップの説明があった。大切なことは教員がお互いの授業内容を理解することであり、そのために有効な手段としてシラバスがあることが示された。さらに、シラバスにおける達成目標の記述にも言及され、我々が定常に行っている業務にも気を配ることで目標達成型教育改善が実現できることが述べられた。

分科会では、レポーターの小講演の後に、参加者による自由討論の場を設けた。一講義で YNU initiative が掲げる教育目標を達成することは難しくても、複数の講義による達成の可能性について議論された。



FD シンポジウムの様子

## FD ニュースレター担当活動報告

1) 第 8 号（平成 21 年 6 月発行、20 頁）

- 1. 新部門長に着任して
- 2. 部門長としてのこの一年
- 3. 本学 FD の今後に向けて
- 4. 平成 21 年度 FD 活動方針
- 5. 平成 21 年度初任教員研修会報告
- 6. 学外 FD セミナー等参加報告  
大学教育研究フォーラムに参加して／第 2  
回大学セミナーハウス FD 研究会報告

2) 第 9 号（平成 21 年 9 月発行、16 頁）

- 1. 各部局活動報告  
教育人間科学部 FD 活動報告／経営学部 FD 活動報告／実践的キャリア教育の推進－工学部シビルエンジニアリングコース／法律系専攻の教育改善の取り組みについて～法曹実務（法科大学院）での試み／英語教育部主催 2009 年度第一回英語実習科目 担当者の集い報告
- 2. 学外 FD セミナー等参加報告  
立命館大学 第 1 回「学生 FD サミット 2009 夏」参加報告／岡山大学 第 6 回教育改善学生交流 i\*See2009 参加報告

3) 特別号（平成 21 年 10 月発行、16 頁）

- 1. 平成 20 年度授業評価アンケート実施状況・分析
- 2. 平成 20 年度自己点検票総括



FD推進部では、授業評価アンケートおよび自己点検票のデータ公開・分析を目的と

特別号表紙（部分）

- 4) 第10号（平成21年12月発行、16頁）
1. FD合宿研修会報告
  2. TA（ティーチング・アシスタント）研修会アンケート結果報告
  3. 平成21年度前期授業評価アンケート結果速報
- 5) 第11号（平成22年3月発行、16頁）
1. FD推進部専任教員紹介
  2. 公開講座報告： 教育人間科学部／経済学部／経営学部／工学部／国際社会科学部研究科／留学生センター
  3. 各学部FD活動報告： 経済学部／環境情報学部／留学生センター
  4. TA研修会報告
  5. 平成21年度FDシンポジウム案内

## 授業改善担当活動報告

### 1) 学生による授業評価アンケート

**実施目的：** 学生の授業に対する声を聞くための授業評価アンケートを各学期末に実施した。回収されたアンケートはデータが集計処理され、担当教員へデータとアンケートの自由記述欄を返却した。返却時に、アンケート結果を受けて次年度の授業改善を計画することを各教員に依頼し、授業改善を達成することを主たる目的としている。

**実施時期：** 前学期：平成21年7月6日～17日  
後学期：平成22年1月8日～29日

**実施科目数（対象科目数）** 前学期：1113科目（1347科目） 後学期：1030科目（1313科目）

**実施科目の回答率（回答者総数／実施科目の履修登録者数）：** 前学期：69% 後学期：66%

**成果と課題：** 全科目を対象としたので前学期は83%、後学期は78%の実施率となった。学生の授業に対する声を教員へ反映させる唯一の手段として有効であるが、いくつかの問題点が指摘されている。アンケート実施が短期間に集中するために学生がいわゆるアンケート疲れを起こして

いる点、評価の基準が各学生で異なる点など評価の正確性に関することや、少人数クラスでのアンケートの意味が明確でない点や実施時期など実施方法に関する点である。これらを受けて、アンケートの質問項目の見直しや実施授業範囲の検討をFD推進部内WGで実施し、各部局の了承を経て、次年度から改善されたアンケートを用いて実施する予定である。

### 2) アンケートに基づく授業改善提案

**実施目的：** 学生による授業評価を受けて、教員が自分の授業をどのように改善するかを考えることを主たる目的とした。アンケート集計結果を教員が受領した時に自己点検票を作成・提出することを依頼し、その改善提案を公開した。公開により、他の教員の授業についての考え方や進め方を学びながら互いに協力して、よりよい授業を学生たちに提供することも目的としている。昨年度に実施した授業改善提案の公開と今年度の授業改善提案の作成依頼と回収を行った。

**公開時期：** 平成21年10月

**実施科目数(アンケート実施科目数)：** 平成20年度前学期：300科目(1086科目) 同後学期：254科目(1025科目)

**成果と課題：** 前年度まではアンケート実施状況・分析と併せて印刷物を作成して全教員へ配布していた。今年度は、アンケート実施状況・分析はFDニューズレター特別号として10月に刊行し、授業改善提案は大学教育総合センターのホームページ上に公開した。前年度までの方法に比べて、早期に教員の手元に報告することができたと共に大幅な経費削減を実現した。

授業評価アンケートの実施からアンケート集計結果の教員が受領し、自己点検票を作成するまでが一連の活動である。しかしながら、最終段の点検票の提出率が前学期で28%、後学期25%と極端に低い。自己点検票の提出方式の見直しなどの改善に留まらず、有効な授業改善が進められる

ために自己点検票に代わる手法など根本的な対応が必要である。

平成 21 年度の学生による授業評価アンケート結果に対する授業改善提案は、前学期は平成 21 年 10 月 30 日、後学期は 3 月 31 日を締切として各教員へ提出を促した。しかし、前年度と同様に提出率の大幅な改善は見られなかった。平成 21 年度の授業改善提案の公開は平成 22 年 7 月を予定している。

### 公開授業担当活動報告

**実施目的：** 授業改善を進めるために、他の教員の授業方法を参考にすることは有効なことである。特に、ベストティーチャーに選ばれた教員の授業は何らかの特徴を持って行われているので、聴講することは非常に価値がある。その目的のために、公開授業を実施し、終了後に座談会形式で授業担当者から授業の工夫などを聴く場を設けることを勧めた。

**実施時期：** 平成 21 年 11 月～12 月

**実施内容：**

11 月 24 日 民法演習 2 渡邊拓准教授（国際社会科学部）

11 月 27 日 初等図画工作科教育法 大泉義一准教授（教育人間科学部）

11 月 27 日 経営情報論ⅡA 田名部元成准教授（経営学部）

12 月 1 日 民法演習 2 今村与一教授（国際社会科学部）

12 月 2 日 計算機のしくみ 白崎実准教授（教育人間科学部）

12 月 3 日 経営管理論Ⅱ 山岡徹准教授（経営学部）

12 月 4 日 比較金融制度論Ⅱ 高橋正彦教授（経営学部）

12 月 8 日 移動現象論 羽深等教授（工学部）

12 月 8 日 演習Ⅱ 小ヶ谷千穂准教授（教育人間科学部）

12 月 14 日 日本語上級 B 奥野由紀子准教授（留学生センター）

12 月 16 日 コンピューティング演習 白石俊彦講師（工学部）

12 月 22 日 現代社会福祉論 相馬直子准教授（経済学部）

12 月 22 日 管理会計論Ⅱ 中村博之教授（経営学部）

**成果と課題：** 各部局の協力により約 1 ヶ月の間に 13 授業を公開授業の対象とすることができた。一部の授業に関してはビデオ撮影があり、参加できなかった教員にも閲覧できるようにしている。授業形態は少人数のゼミ形式から受講学生の発表・発言を主体とした学生参加型、TA の協力を得た演習、さらに大人数の一斉講義まで幅広く提供できた。また、それぞれの授業に工夫が織り込まれ、部局の異なる教員が聴講しても参考になる点があった。内容としては十分と言える企画であった。しかしながら、参加した一般教員の数は多いところでも 10 名に至らず、参加者数の増加が課題として残った。

今年度は後学期の授業科目のみを公開としたが、前学期の授業も公開すべきである。年度始めから準備を始め、次年度は前期授業科目の公開授業も実施する方向に改善する。



公開授業の風景  
経営学部 山岡徹准教授

## 学外シンポジウム等参加実績

学外で開催されたFD推進に関するシンポジウムや講演会、または、教育プログラムの成果報告会にFD推進部委員が積極的に参加し、情報を収集した。収集された情報はFDニュースレターを通して本学教員へ伝えられた。以下の表は参加実績を示しており、FD活動の中心となる教育改善から特色ある教育改善プログラム(GP)、大学評価と幅広く参加している。

シンポジウム等の名称	開催日	開催地
大学教育学会 第31回大学教育学会大会「テーマ:教育者としての大学教員」	2009/6/6-7	八王子
大学セミナーハウス 第2回FD研究会「新任教育研修プログラムのデザインと開発」	2009/6/13	東京
国立教育政策研究所 特別シンポジウム「質保証の全体像を探る」	2009/7/25	東京
北里大学 第5回高等教育開発センター講演会「大学教員の能力開発—教育と研究と学問的誠実性—」	2009/7/31	相模原
大学評価・学位授与機構 大学評価フォーラム「内部質保証システムの充実をめざしたアカデミック・リソースの活用」	2009/8/3	東京
立命館大学 第1回学生FDサミット・2009夏	2009/8/29-30	京都
岡山大学 第6回教育改善学生交流 i*See2009	2009/9/22-23	岡山
名城大学 第11回FDフォーラム「学生が本気で取り組む「学び」の方法論について考える」	2009/11/6	名古屋
創価大学 第7回FDフォーラム「学士課程教育の拡充と重層的なFD活動」	2009/12/12-13	八王子
文部科学省・文教協会 平成21年度大学教育改革プログラム 合同フォーラム	2010/1/7	東京
東京農工大学 特色GP「興味と経験から学びを深化させる基礎教育—4つの段階を踏む教育モデル—SEED—」シンポジウム	2010/1/21	府中
長崎大学 FD・SDシンポジウム「ファカルティ・ディベロップメントの再構築」	2010/1/23	長崎
立命館大学 学生FDサミット・2010冬「大学を変える、学生が変わる」	2010/2/20-21	京都
山口大学 教育GPシンポジウム「目標達成型大学教育と山口大学におけるFD活動」	2010/3/6	東京
大学コンソーシアム京都 第15回FDフォーラム「学生の学びを支える—つなぐFDの展開—」	2010/3/6-7	京都
熊本大学 第3回eポートフォリオ研究会—次世代Web技術を活用した学習環境の新展開—	2010/3/16	熊本
京都大学 第31回大学教育研究フォーラム	2010/3/18-19	京都

## 他大学 FD 推進機構の訪問調査

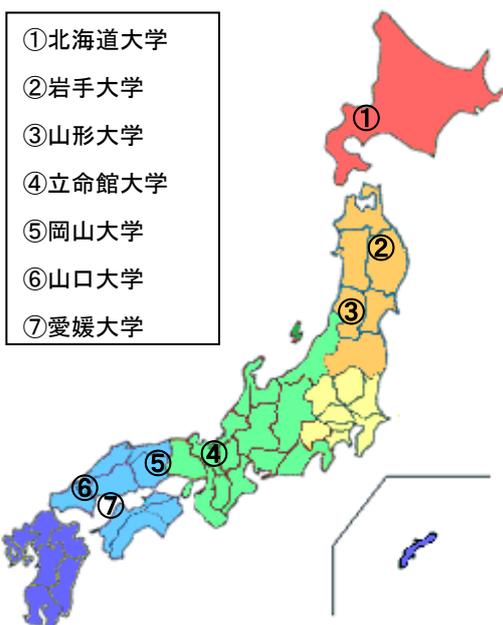
### 訪問調査の目的

横浜国立大学のFD活動はシンポジウムや学生の授業評価アンケートなど定常的な企画を実施してきている。これらに対して以下の課題がある。運営されている企画が授業改善に有効に作用しているか、そして、授業改善のために新たな企画として何が必要かという課題である。一方、今年度はYNU initiativeの制定を受けてFD推進部のとるべき行動に新たな課題が加わった。これらの課題解決のためには、内部での議論に加えて、FD活動に関して先進的な大学から情報を得ることが効果的である。この目的の下に、今年度は7大学のFD関連組織を訪問し、新たなFD活動に関する調査を行った。



山形大学小白川キャンパス

<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kaizen/ksite/index.html>



### 1) 山形大学

訪問日：平成22年2月3日（水）

訪問先機構・対応者：高等教育研究企画センター・

小田隆治教授、杉原真晃准教授、酒井俊典助教

訪問者：FD推進部 上野誠也、金馬国晴、安野舞子

調査内容：山形大学は、東日本において「FD

に関する取組でモデル、もしくは参考にされている大学」ナンバー1の大学である（2008年の読売新聞全国調査より）。このように全国から高い評価を受けている要因は、東日本の諸大学をつないだFDネットワーク“つばさ”の設立にあるが、このネットワークは山形大学がそれまでに積み上げてきたFDのノウハウを技術移転することで発展してきた。

これまで山形大学のFDを牽引してこられた小田隆治教授は、訪問インタビューの中で、「公開」と「共有化」というFDの理念を強調されていた。すなわち、FDとは決して「ダメな教員を教育すること」ではなく、日常的に行われている効果的な教育活動の情報を学部や大学の垣根を越えて公開し、共有することで、よりよい教育改革を実現することにあるという。

山形大学では、「学生と教員による授業改善アンケート」（教養教育のみ）をはじめ、「教養教育ワークショップ」や「公開授業・公開討論会」、「教養教育FD合宿セミナー」、「ベストティーチャー賞」など多角的なFD活動を行っている。どの活動も永年にわたり上手く定着しているのは、「悪いところは無限にある。良いところを発見し、伸ばすFDを」というポジティブな考え方にあるのではないだろうか。（報告者 安野）

## 2) 岡山大学

訪問日：平成 22 年 2 月 4 日（木）

訪問先機構・対応者：教育開発センター・橋本勝教授、佐々木健二教授、山内源氏

訪問者：FD 推進部 金馬国晴、安野舞子、福富洋志、教務課 鈴木誠彦、鈴木幾久子

調査内容：岡山大学にとっての FD とは、「教員一人一人がどのように授業改善するかということに主眼があるのではなく、あくまで教育組織として、全体としての教育をどう改善し、発展させていくかという観点」を重視することにある。よって岡山大学には、教育改善の実効性を上げるためには、教職員の連携だけでなく、教育サービスの受容者である学生の主体的参画が必要である、との考え方が伝統的にある。

こうした学生参画型教育改善の推進は、平成 17 年度に「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」に取組が採択されることにより、学生参加型 FD の先駆けとして全国的に注目を浴びるようになった（取組名称：「新機軸「学生参画」による教育改善システム」）。今回の訪問は、本取組の詳細を伺うことが大きな目的であった。

学生参画型教育改善の推進軸になっている「学生・教職員教育改善委員会」の特徴は、その組織の委員長が学生、ということにある。副委員長には、岡山大学の FD を牽引する橋本勝教授が就任されているが、この「学生が委員長」というところに、学生の主体的参画を実践する岡山大学の“本気度”が見て取れる。



岡山大学津島キャンパス

[http://www.okayama-u.ac.jp/user/hasep/pic/\\_310album/index.html](http://www.okayama-u.ac.jp/user/hasep/pic/_310album/index.html)

本委員会が主催するイベントの一つに「教育改善学生交流会」があるが、これには、大学教育改善に興味関心を持つ学生が全国から集い合う。今後学生参加型 FD 活動を目指す本学からも、是非とも学生を派遣していきたい。（報告者 安野）

## 3) 愛媛大学

訪問日：平成 22 年 2 月 9 日（火）

訪問先機構・対応者：教育・学生支援機構 教育企画室・秦敬治准教授、城間祥子助教、大竹奈津子特定研究員、石川尚氏

訪問者：FD 推進部 金馬国晴、安野舞子、教務課 高柳圭悟、増田和彦、外久保将己



愛媛大学城北キャンパス

[http://koyu.ehime-u.jp/other/photo\\_gallery.htm](http://koyu.ehime-u.jp/other/photo_gallery.htm)

調査内容：西日本の「FD モデル」第 1 位にランキングされた愛媛大学（2008 年の読売新聞全国調査）では、教員・職員・TA が愛媛大学の理念と目標を共有し、教育の質の向上を目指して一体となって能力開発に取り組んでいる（平成 18 年度には、「FD/SD/TAD 三位一体型能力開発」として特色 GP に採択）。その活動は誠に多彩であるが、全学的な教育改革の取組が活発に行われている大きな要因の一つは、全学の FD 担当組織である「教育企画室」と各部局から選出された教育コーディネーターとの密接な連携にあるといえる。

話を伺う中で最も驚いたのは、教職員および部局間の“垣根の低さ”である。特に前者に関して

は、愛媛大学のFDを牽引する秦敬治准教授がかつては私立大学の事務職員であられたことにも起因しているのかも知れないが、教員と職員の間には教育改善のための意見交換を対等に、そして楽しく活発に行うカルチャーがあるのを感じた。

愛媛大学のFDの実績は、現在四国地区に技術移転されており、「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(通称SPOD)」が設置されている。本ネットワークは、「学生の豊かな学びと成長を支援する、実践的力をもった「高等教育のプロフェッショナル」を輩出することを目指して」おり、システムティックなFD/SD活動の範を更に全国に示していくであろうことが期待される。(報告者 安野)

#### 4) 山口大学

訪問日：平成22年2月22日(月)

訪問先機構・対応者：大学教育機構大学教育センター・岩部浩三教授、吉田香奈准教授

訪問者：FD推進部 上野誠也、金馬国晴、安野舞子、教務課 中島庸介、松本竜大、黒岩孝



山口大学吉田キャンパス

調査内容：山口大学の組織的な教育改革が教育GP「目標達成型大学教育改善プログラム」に採択されている。このプログラムは、大学が学生に保証する教育の質を達成するために、個々の授業科目がなすべきことを明確にし、それを実現するための取り組みである。この取り組みはYNU initiativeに掲げる教育目標の達成に相当するプ

ログラムであるため、その手法や実施体制などを調査した。

山口大学では、個々の科目が全学の教育目標のどの部分を担当しているかが示されたカリキュラムマップを作成し、質の保証を目で見える形で確保している。重要なことは、あらゆるFD活動に大学教育センターが各学部のサポート役に徹し、マップの作成などには準備作業を担当していることであった。全学組織の個々の学部に合わせて地道な活動が大きな目標を達成していることを教えられた。(報告者 上野)

#### 5) 立命館大学

訪問日：平成22年2月23日(火)

訪問先機構・対応者：教育開発推進機構教育開発支援センター 安岡高志教授、沖裕貴教授  
訪問者：FD推進部 上野誠也、金馬国晴、安野舞子、教務課 松本竜大、黒岩孝

調査内容：立命館大学はFD推進活動に関して組織も活動内容も最上位の大学である。対応者の安岡先生は本学のFD合宿研修会に講師として招いたこともあり、沖先生は前任の山口大学で目標達成型の教育改善に取り組んでいた方である。YNU initiativeの実現、学生参加によるFD活動、授業評価アンケートと授業改善、全学組織と学部組織の関係など国大が抱える課題やこれから取り組もうとする企画に有益なアドバイスを求める調査であった。



立命館大学衣笠キャンパス

目標達成型教育改善には、教員が自分の科目ではなく大学の科目を教えているという意識改革が必要であり、そのためには各学部へ出向いて行って、実情に合わせた行動が有効である。全てのFD活動においても同様に、学生も含めたプラスの循環を生み出すことが重要であり、負担の少ない教育改善へ進むことがよい。目指すFD活動は「やらされ感の無いFD」であると教えられた。  
(報告者 上野)

## 6) 岩手大学

訪問日：平成22年3月9日(火)

訪問先機構・対応者：玉真之介理事・副学長

訪問者：FD推進部 金馬国晴



岩手大学キャンパス内の標語

調査内容： 「持続可能な社会のための教養教育の再構築：『学びの銀河』プロジェクト」ということで、教養科目に、国連が提起したESD(持続可能な開発のための教育)という視点を織り込み、「21世紀型市民」育成の教育プログラムとして再構築した話を伺った。もとは教養改革が暗礁に乗り上げた際、何か統一的理念をとということで、環境教育に関心のある教員が多かったことから、当時から理事・副学長を務め、大学教育総合センター長も兼務していた玉先生が提起し、自ら取組実施責任者となって、現代GPを申請し進めてきたという。

興味深く聞いたのは、「関心の喚起」「理解の広

がり」と深化」「学生参加型」「問題解決の体験」という、教養科目の実践的性格を示した新しい指標や、学生が専門分野の枠を越えて科目相互のつながりや現実とのつながりを理解できるしくみ(「学びの銀河」)、そして「高年次課題科目」(男女共同参画の実践を学ぶ、都市の自然再生プランニング、北上川流域学実習など)、専門家を招いての教員向け「ESD 銀河セミナー」などについてである。

とくに国大に示唆的なのは基礎ゼミナールで、『大学における「学び」のはじめ』という冊子を編集し、全ての新入生に配布するなどしてきた。教員に1年次が大事だという意識が共有され、「自分たちは基礎ゼミナールがなくて不幸だった。一学年下の学生はうらやましい」と言う学生も現われたという。玉理事の「この3年間で一番、この大学の成果を確認できるのが基礎ゼミかもしれないですね」という言葉に、国大の理想を重ね合わせた。

さらに、県内の幼小中高専門学校との間でも、ESD 円卓会議を始めたという。統一的な、だが多彩に展開できる理念によって、方々につながり広がっていく可能性を感じた。(報告者 金馬)

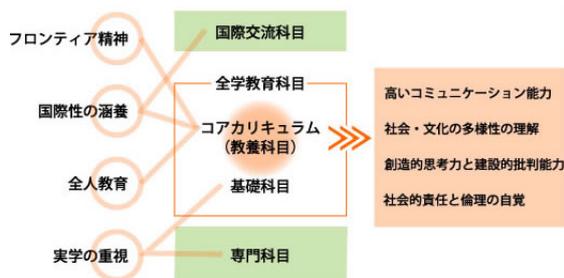
## 7) 北海道大学

訪問日：平成22年3月16日(火)

訪問先機構・対応者：高等教育機能開発総合センター 細川敏幸教授、安藤厚教授

訪問者：FD推進部 金馬国晴、技術部 長谷川紀幸

調査内容： 全学共通の教養科目をコアカリキュラムと名付け、カリキュラム全体の中心に据えてきた(2001～)のが北大である。外国語、情報科目などを含むが、専門教育の基礎となる基礎科目とは区別して、純粋な教養科目と位置づけられている。「最良の専門家による最良の非専門教育」をモットーに、全学の広い協力により運営されているという。とくに興味をもったのは、一般教育



北海道大学の基本理念と教養教育の目標<sup>1)</sup>

演習という初年次ゼミである。フレッシュマンセミナーと呼ばれ、論文指導のクラスも含む。ガイドライン（2002）が作られて、申し合わせもされている。

この全学の教養科目と密着しながら、FD が努力義務化される前から、新任教員研修（1995～）、全学 FD 合宿と TA 研修会（1998～）を行ってきたのである。

学生に対しても毎年、コアカリキュラム・パンフレットを全新入生に配布している（2001～）。そこには、教養科目という「コアカリキュラムは

北海道大学という『世界』の歩き方を示す案内板』のようなもの、「それを参考に、自分の意志と力で歩くことによって、専門分野という多彩なモザイクで構成されている『現代世界』に無理なく自然に参加し、それを自分で経験することができません」などと、イメージしやすく表現されている。

授業評価アンケートについては、全国に先駆けて1993年に施行し、1999年から毎年実施してきたという。合宿研修にしても、内容豊富なレクチャーに、シラバスづくりを組み合わせたワークショップ形式で、毎年行ってきたという。「北大では、FD でやっているのだから、全員が大人数講義でもグループ学習を指導できる」という話には驚いた。

何でも先駆的との印象を持った。国大にとって学ぶところがとても多いと思う。（報告者 金馬）

1) 北海道大学「進化するコアカリキュラム」ホームページ：<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/neouniv2/html/kihon.htm>

平成 21 年度 FD 推進部委員名簿

部門長・兼務教員	上野誠也	経営学部	松井美樹
兼務教員	金馬国晴	国際社会科学研究所	吉村政穂
専任教員（2009/12/16 より）	安野舞子	工学部	福富洋志
教育人間科学部	森本 茂	環境情報学府	岡嶋克典
経済学部	上川孝夫	留学生センター	四方田千恵

YNU FD ニュースレター 特別号  
平成 21 年度横浜国立大学 FD 活動報告書

編集 : 横浜国立大学 大学教育総合センターFD 推進部

事務担当 : 教務課大学教育係

問合せ先 : [kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp](mailto:kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp)

発行 : 平成 22 年 5 月発行